



こうふ開府500年  
1519-2019

平成30年11月発行 / 甲府市企画部 開府500年企画課 甲府市丸の内1-18-1 TEL.055-237-5321



こうふ開府  
500年の  
歴史  
The 500th Anniversary  
of the Establishment  
of Kofu  
1519—2019



つなぐ歴史 かがやく絆 こうふ開府500年

# ごあいさつ

甲府市長 **樋口 雄一**

甲府のまちは、1519年(永正16年)に武田信玄公の父である信虎公が、躑躅が崎の地、現在の武田神社の場所に館を移し、有力国人衆や家臣をその周辺に住まわせるなど、今のまちの礎となる大規模な城下町の整備に着手したことに始まり、2019年には500年という歴史的な節目を迎えることから、この年を「こうふ開府500年」として、「過去に学ぶ」「現在(いま)を見つめる」「未来につなぐ」を基本理念に、多くの皆様のご理解・ご協力をいただく中で、様々な記念事業に取り組んでいるところであります。

開府500年という歴史的に大きな節目に立ち会えることは、私にとりましても大きな喜びであり、市民の皆様にとりましても、ふるさと甲府を見つめ直していただく好機であると考え、このたび、小冊子「こうふ開府500年の歴史」を発行する運びとなりました。

小冊子につきましては、甲府の始まりとなった戦国時代、甲府城を中心とした城下町が発展し、大きな賑わいをみせた江戸時代、明治維新、市制施行を経て

近代化が進んだ明治・大正時代、甲府空襲と高度経済成長の波に乗った昭和時代、歴史的な節目であるこうふ開府500年、中核市へと移行する平成時代まで、甲府が歩んできた500年を余すところなく収めております。

こうして絶えることなく連綿と受け継がれてきた歴史を、現在(いま)を生きる私たちが継承し、次代へと繋げていかなければなりません。

この小冊子が、皆様にとりまして、先人によって築き上げられた甲府の重層的な歴史や伝統、文化などを学び、知る契機となり、甲府への愛着を深め、新たな未来への第一歩を踏み出す一助になれば幸甚です。

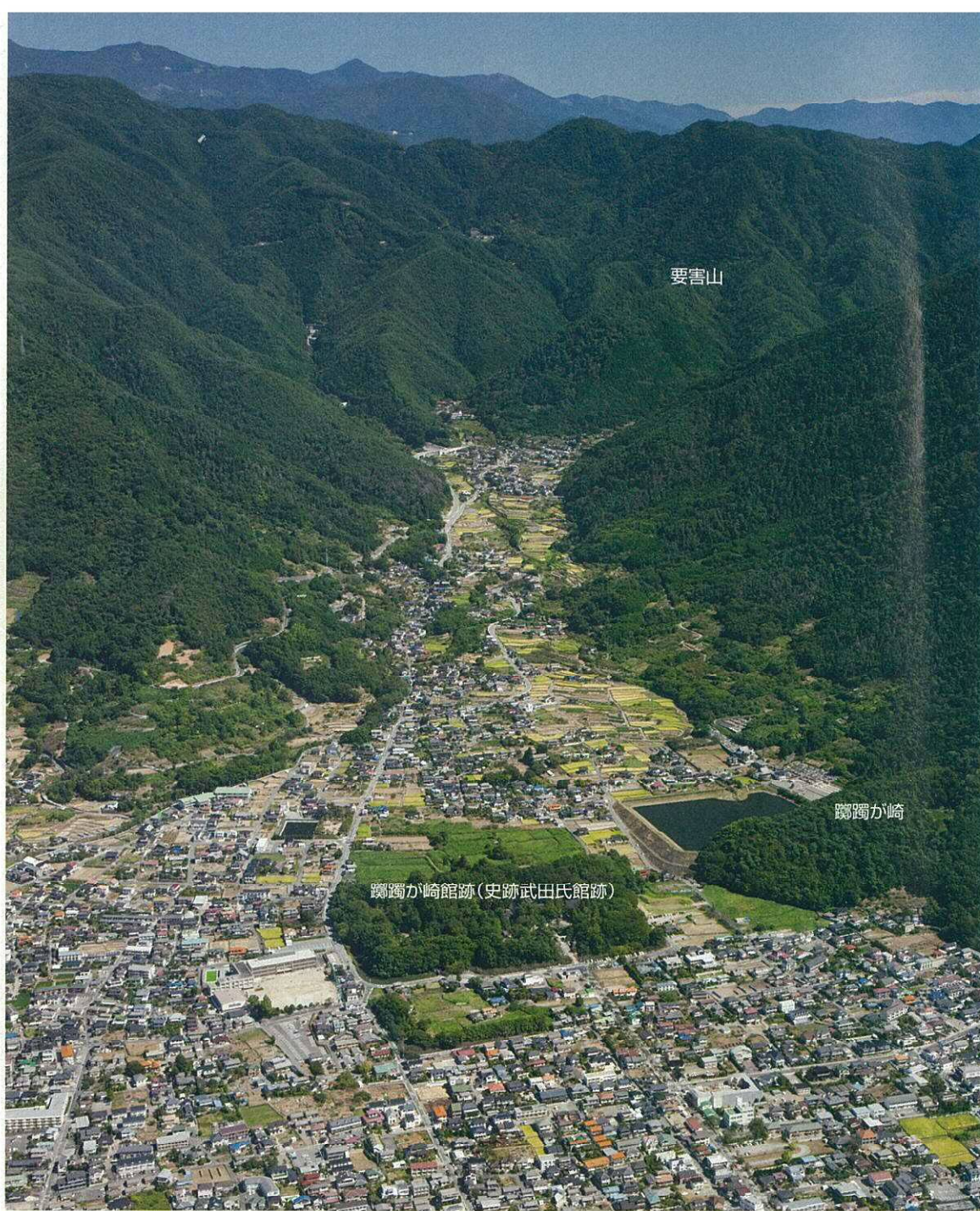
## こうふ開府500年の歴史

- 01 ごあいさつ  
甲府市長 **樋口 雄一**
- 03 戦国時代 **武田信虎と開府500年**
- 04 躑躅が崎館と城下町
- 06 **信玄の登場と武田家の滅亡**
- 07 信玄の国造り
- 09 江戸時代 **甲府城の建設**
- 10 是ぞ甲府の花盛り
- 12 甲府城下周辺の村々
- 13 **甲府に根づく庶民文化**
- 14 幕末維新の時代
- 16 明治・大正 **明治維新下の甲府**
- 17 近代都市甲府の成立
- 19 **甲府市の誕生**
- 20 汽車開通～中央線～
- 21 武田神社創建と市立動物園

# 目次

- 22 昭和 **戦争と復興**
- 23 甲府空襲
- 24 焦土から立ち上がる甲府市
- 25 高度成長下での発展
- 27 平成 **平成、新しい時代へ**
- 29 **そして未来へ**

# 武田信虎と開府500年



武田信虎像(大泉寺 所蔵)

## 武田信虎と躑躅が崎館

室町幕府8代将軍足利義政の後継者をめぐる争いは、多くの守護大名を巻きこんだ戦乱へ発展しました。この《応仁の乱》(1467~77年)で幕府の力が弱まり、列島各地に領国と領民を独自に支配しようとする戦国大名が現れました。領国拡大を目指す彼らの激しい戦いが列島を覆った15世紀後半から約100年間を《戦国時代》と呼びます。

甲斐国(山梨県)でも、守護職を継承していた武田信昌と子の信繩の仲たがいに、各地の諸氏(その多くは武田氏の一族です)も両派に分裂。信昌・信繩が相次いで没した後、永正4(1507)年に武田家当主の座についたのが信繩の長男《信虎》でした。信虎は、翌5(1508)年に叔父の信忠を滅ぼし甲斐統一を目指しますが、他国勢力の後押しを受け反抗を繰り返す氏族もありました。こうした抗争がひと段落した永正16

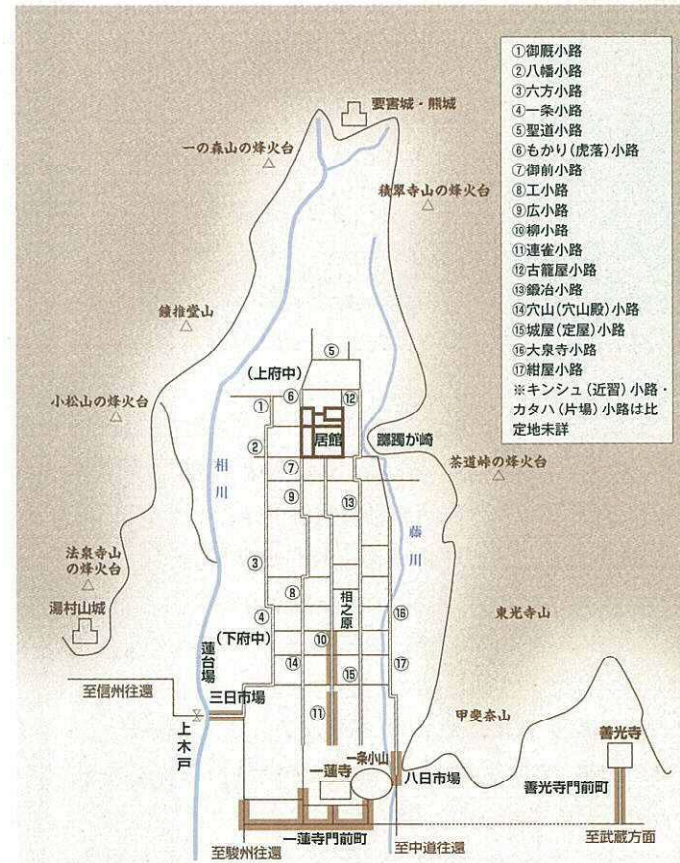
(1519)年、信虎は一大事業を成し遂げます。

甲府盆地北辺の太良峠に発する相川の扇状地の頂部に新たな本拠となる館を構えたのです。南側に傾斜地がひらけ、ほかの三方に山を背負う要害の地。館は東方の丘陵の名にちなんで、《躑躅が崎館》と呼ばれました。

## 「新府中」の誕生

当時の記録にも、「新府中」「府中」(高白斎記)、「甲州府中」(勝山記)といった表記が見受けられます。「府中」には、「政治を行うところ」といった意味があります。「新府中」「甲州府中」は、それぞれ「新たな府中」「甲斐の政治の中心地」といった意味になるでしょう。やがては、躑躅が崎館を、さらにはその南側に整備された城下町をさして、「甲府」と呼ぶようになりました。永正16(1519)年の躑躅が崎館造営に、《甲府開府》の起点を求めるゆえんです。

## 躑躅が崎館と城下町



戦国時代の甲府城下町推定復元図

## 知ってる? 館を取り巻く城砦群

躑躅が崎館は、南をのぞく三方を山地に囲まれています。いわば天然の要害です。それをより強固なものとするよう、取り巻く尾根の要所や高所には、城や砦



が築かれていました。写真中央が要害山です。この写真では周囲にとけこんでしまっていますが、麓からは独立峰のように見えます。永正16(1519)年末に躑躅が崎館へ移った武田信虎は、翌年6月、ここに非常時に立て籠もるための施設(詰城といひます)の造営を開始します。その翌大永元(1521)年に駿河国の軍勢が甲府盆地の奥深くまで侵攻すると、身重の信虎夫人は館を離れ、この城に避難したといひます。大永3年(1523)には湯村山に、同4(1524)年には一条小山(のちに甲府城が営まれます)に、それぞれ築城が開始されたことが記録に残っています。この後も順次、館を取り巻く尾根上に諸城砦が整備されていったものと考えられます。

## 館の拡張

館の造営が始まったのは永正16(1519)年8月15日のことです。この日、地鎮祭を執り行くと、翌日には信虎自身が建設現場に足を運んでいます。新館の建設にける信虎の思いが伝わってきます。工事は順調に進んだようで、信虎夫妻は年末12月20日には転居をすませています。

武田神社の社殿がある一画を主郭と呼びます。堀と土塁(土手)が取り巻く正方形で、一辺が200メートル強あります。ここが文字どおり館の中心で、最初に築かれたと考えられている部分です。主郭のほかにも、同じく堀や土塁に囲まれた区画(曲輪といひます)が認められます。主郭の西に堀を隔てて隣接するのが西曲輪です。主郭とは異なり、南北双方に二カ所の出入口が設けられていました。近年の発掘調査では、三



躑躅が崎館土塁跡

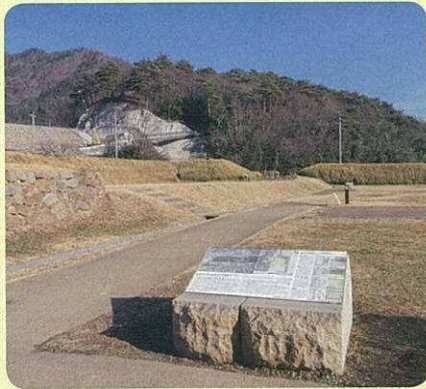
段の平坦面が造成されていることが確認されています。天文21(1552)年に信玄の長男義信が隣国駿河の今川義元の息女を妻としたおりに増設された部分です。北方に

連なる御隠居曲輪は、信玄の母・大井夫人の居所と伝わります。こうした曲輪は、必要に応じ、信玄・勝頼と代を追って拡充されていったものと考えられます。

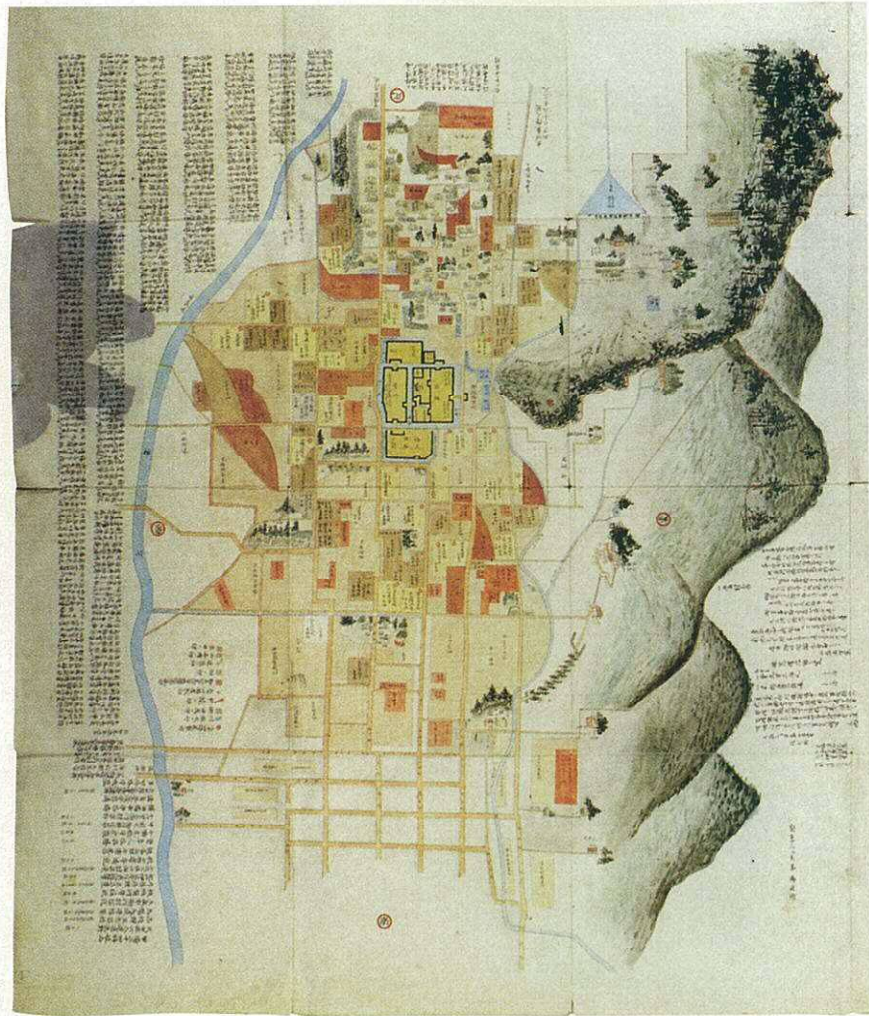
### 知ってる?

#### 館の正面は?

現在、武田神社の参道は武田通りのつきあたり、つまり館の南辺からまっすぐに延びています。堀には橋が架かり、土塁(土手)は切通しとなっています。これらは大正8(1919)年の神社創建にともない整えられたものです。本来の出入口(大手)は、東側にありました。橋ではなく、部分的に掘り残して通路としていました。これを土橋といえます。近年、この付近の発掘調査が進み、そうした成果にもとづき大手東史跡公園が整備されています。



大手東史跡公園



古府城下絵図(武田神社 所蔵)

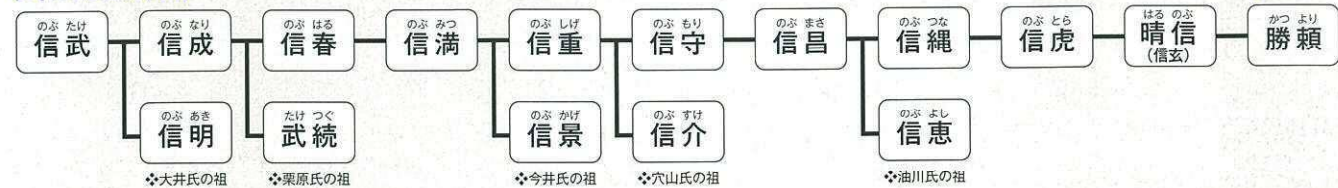
#### 城下町の構造

南方にかけて広がるゆるい傾斜地上には、南北5本の基幹街路を設けた城下町が整備されていきました。館と同様、信虎から勝頼の代にかけ、整えられていったと思われていますが、最終的には積翠寺(のちにここに甲府城が築かれました)に所在した一蓮寺やその門前町に及ぶ広大な城下町となりました。

城下町の北半分は、館を中心に家臣の屋敷地にあてられたようです。その南方に商人・職人が集められました。城下南端の西側・東側双方の入口には、三日市場・八日市場という二つの市場が設定されました。

戦国時代の甲府城下町は、左右対称形を意識して整備されていることから、平安京など古代都市の系譜をひいていると指摘されています。

#### 武田氏系図



# 信玄の登場と武田家の滅亡



武田晴信像(武田神社 所蔵 高野山持明院所蔵画像写し)



甲陽軍鑑攻戦地理図と甲陽軍鑑(武田神社 所蔵)

#### “甲斐の虎” 信玄誕生

武田信虎が甲府を開府した2年後、1521年11月3日。躑躅が崎館の裏手の積翠寺・要害城で、長男、勝千代は生をうけました。元服して晴信、39歳で信玄と号します。

この頃、父の信虎は駿河国(静岡県の中郡)の今川氏や国内対抗勢力の同盟軍と激しい戦いを繰り返していました。信玄は、その渦中、信虎が正室の大井夫人を要害城に避難させていたとき、まさに戦国の申し子として誕生したのです。

この時の合戦を契機に、信虎は国内の反対勢力をほぼ制圧し、甲斐統一を達成。駿河側とは1536年に君主となった今川義元と和睦を結び、長年の敵対関係を解消しました。かわって信濃(長野県)への侵攻を強めていきます。元服した晴信16歳の初陣も信濃の佐久攻めといわれています。

そして信玄は、この山峡の地から、天下の舞台へと、幾多の戦場を駆け抜けていくことになります。

また、信玄は戦いに明け暮れただけではありませんでした。甲斐の国造りと国固めにも力を注ぎ、戦国大名の中でも傑出した武将として、徳川家康をはじめ敵方からさえ畏怖されたゆえんもここにあるといえます。

#### 戦国一の武将を育てた環境

幼少時の勝千代(武田信玄)は、教育熱心だった母の大井夫人に手を引かれ、大井氏の菩提寺「長禅寺(現・古長禅寺)」に足を運んだといえます。臨済宗妙心寺派の名僧「岐秀元伯」から、幼くして様々な学問を学びました。その一つが「孫子の兵法」。その後、青年時代には詩歌や文学、芸能にも深く親しんでいきました。後に発揮される数々の戦術、領国経営を支えた哲学思想がこの頃に養われました。岐秀和尚は「信玄」の法名を授けた人物です。豪胆な父と慈愛あふれる母の教養、伝統ある守護家の環境、さらに甲斐の大自然が戦国の世に希有なる英雄を育てたと言えます。



長禅寺(甲府市) 武田信玄により愛宕山の南麓に移され母大井夫人の菩提寺となった。旧地には古長禅寺が残る。

## 新府城への転居と武田家の滅亡

父・信玄の跡をついだ勝頼も、西方への領国拡大を図りました。当初こそ、信玄さえなしえなかった高天神城（静岡県掛川市）を攻略するなどの戦果をあげましたが、やがて織田信長や徳川家康に巻き返しを許します。天正3（1575）年の長篠の戦い（愛知県新城市）での敗戦が、転機になったことは、よく知られています。守勢にまわった勝頼は、信玄時代の仇敵上杉氏と同盟関係を結んだり、外交に活路を見出そうとしますが、効果はうすく、信長からの圧力は次第に強さを増していきます。

そうしたなか、勝頼は躑躅が崎から北東に約8km離れた七里岩台地（韮崎市）に新たな本拠の造営を開始しました。天正9（1581）年の2月に始まった築城ですが、9月には一応の完成を見たようで、勝頼も年末には転居を終えたといえます。この城は、新府城と呼ばれます。しかし、翌10（1582）年正月末、信濃国（長野県）の木曾地方の領主で勝頼には義弟にあたる木曾義昌が、織田方に寝返ったのを好機ととらえた信長は、武田領国へ向け大軍を差し向けてきました。武田方からは織

田方へ通じる者や逃亡する者が続出します。不利を悟った勝頼は、3月初旬、新府城に火を放ち、東方へ逃れました。早くも織田勢は、6日には甲府まで進みました。日川の上流部（甲州市）に追い詰められた勝頼は、11日に妻子らとともに自害し、ここに武田家は滅んだのです。



新府城跡（韮崎市教育委員会提供）  
八ヶ岳南麓から甲府盆地へと延びる七里岩台地の南西端に位置する。西側の崖下を釜無川が流れる。

## 信玄の国造り

### 国造りの要となった「治水」

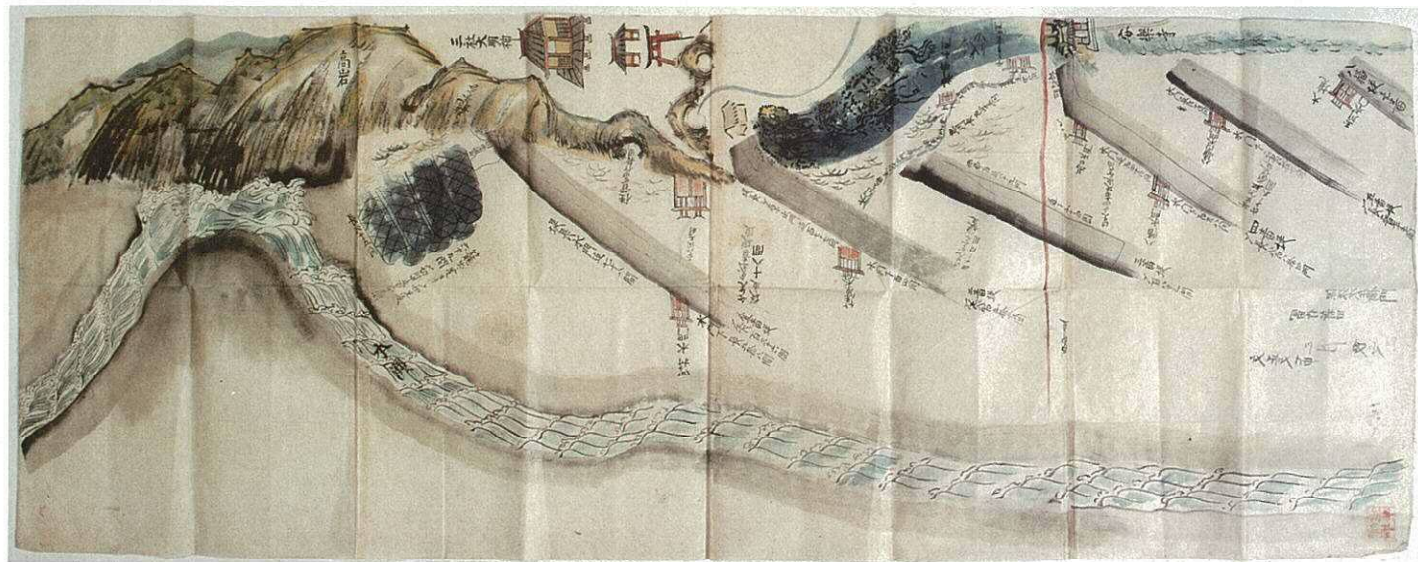
古来から、河川の集中する甲府盆地は、釜無川と笛吹川の流域を中心に、たびたび大水に見舞われ、住民は甚大な被害に悩まされてきました。

1541年、重臣とともに父・信虎を同盟国の駿河へ退隠させた晴信は、弱冠21歳で甲斐国の国主となります。

晴信は信濃侵攻を本格化する一方で、父の時代の激闘

で疲弊しきっていた国内の立て直しに力を入れ、その要として「治水事業」に早速着手しました。20年の歳月をかけて完成させたと伝えられる「信玄堤」は、水害から民を救い、耕地開発を進めて国土を豊かにしました。

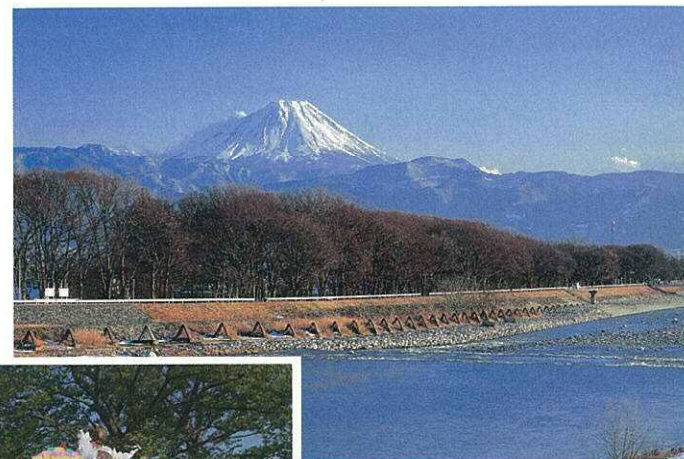
一般的に治水事業は信玄の偉業といわれていますが、信虎の時代にも万力堤や荒川堤などの構築改修工事、水田開発のための灌漑治水に着手していたようで、信玄はこの点でも父の跡を継いだといえます。



信玄堤絵図（保坂家資料 個人蔵）

### 今も現役の「信玄堤」

釜無川と御勅使川が合流する地点は、頻繁に大洪水に見舞われていました。信玄が築堤を命じた「竜王堤」（江戸時代から信玄堤と呼ばれる）は、当時としては画期的な工法でした。概観すると、当時、御勅使川の流れを北側に変えて固定し、高岩に当て水勢をそいだ上で釜無川と合流させ、堤への直接的な影響を緩和する方策が採られています。また、高岩の南に築かれた信玄堤は延長約630メートルと推定され、流れに向かって突き出た短い堤を何段にも重ねて築いた雁行堤の構造であったと考えられています。武田氏が滅んだ後も信玄堤の普請は受け継がれ、1959年の伊勢湾台風でも流域住民を守っています。また、洪水がないよう、今も毎年4月15日に信玄堤を大切にしておく祭り（おみゆきさん）がおこなわれています。



釜無川と信玄堤



おみゆきさん



※写真は江戸時代の甲州金  
（山梨中央銀行金融資料館 所蔵）

### 金山開発と甲州金

金山開発と甲州金の製造は信玄の事績を語る上で欠かせないものですが、きちんとした通貨制度として確立していたか、疑問が投げかけられています。甲州金の起源が武田氏の時代に遡ることは確実ですが、両・分・朱・糸目の額面を打刻した貨幣制度の確立は、今日では武田氏滅亡後のことと考えられています。



### 甲州栞（信玄栞）

甲斐国独自に使われていた栞で、大きさは一般的な京栞の3倍。信玄が領国経営のために確立し、後世に伝えられてきた遺法と考えられています。江戸時代に京栞の使用が義務づけられた時も、甲斐国だけは甲州栞の使用が特別に認められていました。

### 孫子の旗 （雲峰寺 所蔵）

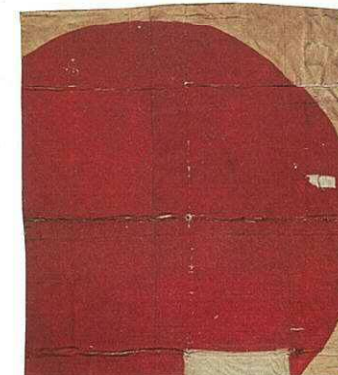
その生涯で130回にもおよんだ合戦の場で、武田信玄が本陣に掲げていたとされる軍旗「孫子の旗」。旗に書かれた14文字は、信玄が幼少期から学んでいた中国の書物の「孫子軍争編」から引用されています。このような軍旗は戦国武将のなかでも大変珍しく、戦国最強と恐れられた武田軍を象徴する存在として、軍旗を見るだけで敵は震えあがったといわれます。「風林火山」の精神は現在も私たちに残っているかもしれません。



### 守随秤

（山梨中央銀行金融資料館 所蔵）

信玄は、「甲州金」を正しく円滑に流通させるため、まず、当時の粗悪な秤ではなく、精密で均一な秤を職人につくらせました。その秤職人の一人が吉川守随でした。非常に高度にできたその秤は「守随秤」と呼ばれ、武田家滅亡後も徳川家康によって取りたてられ、江戸幕府のもと東国33か国の共通の秤として特権を得ました。



### 日の丸の御旗 （雲峰寺 所蔵）

「盾無鐘」とともに武田家の神宝とされてきました。天喜4（1056）年、源頼義が後冷泉天皇から下賜され、その三男・新羅三郎義光以来、甲斐源氏の惣領に代々受け継がれてきました。

# 甲府城の建設

## 甲府城の完成



甲府城山手渡櫓門

天正10(1582)年3月、武田勝頼を滅ぼした織田信長は、甲斐国の大半を家臣の川尻秀隆に与えました。しかし、秀隆は、本能寺の変のち、蜂起した武田遺臣たちの手にかかって落命してしまいます。その後、北条氏との抗争を経て、徳川家康が甲斐国を領有しますが、豊臣秀吉に国替を命ぜられ、関東に去りました。代わって、秀吉の養子秀勝(実甥)が入国します。在国8か月にして秀勝が甲斐国を離れると、秀吉の近臣加藤光泰がこれに代わりました。天正19(1591)年春のことです。光泰は、躰躰が崎館を修築、拡充して、ここを拠点に甲斐国の支配を開始したといいますが、朝鮮出兵中にかの地で病没してしまいます。国もとの様子を案ずる光泰の書状が数通伝わっています。死を前に朋友浅野長政に宛てた手紙では、甲斐国について、「かなめ之所」=要所、「御国はし」=家康領国に対する最前線だと述べています。光泰の遺児貞泰は幼く、秀吉も〔要国〕の領主は荷が重いと判断したのでしょう。浅野長政に甲斐国をゆだねました。総石垣造り、白亜の櫓が軒を並べる甲府城が完成したのは、この浅野氏の時代です。



浅野長政像【模写】  
(東京大学史料編纂所 所蔵)

### 知ってる?

#### 築城の開始を物語る史料

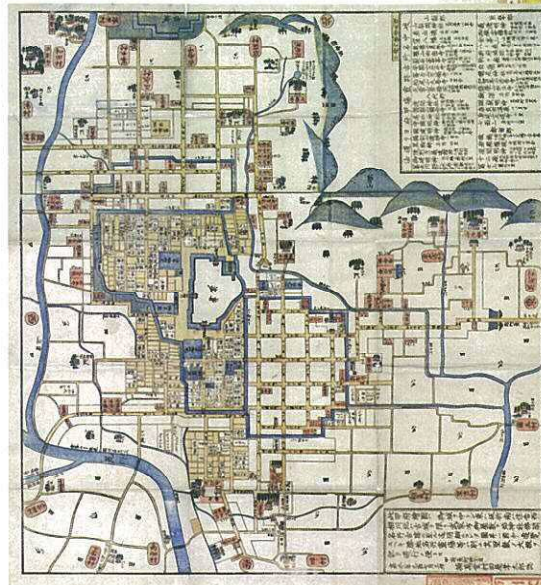
土塁(土手)を主体とする武田氏の躰躰が崎館とは違って変わって、甲府城は総石垣造りの城です。武田氏の滅亡後に甲斐に入った勢力により築かれました。徳川家康、豊臣秀吉の家来の加藤光泰、同じく浅野長政・幸長父子……。築城者をめぐっては、文献史料だけでは決め手に欠け、議論百出の観がありました。発掘調査により金箔でいるどられた瓦のほか、豊臣家の家紋(五三桐)や浅野家の家紋(丸に違い鷹の羽)をあしらった瓦が出土しており、浅野長政・幸長父子が本格的に築城工事を進め、完成をみたとする説が有力です。工事の開始時期についても、1590年代と推定されるだけで、「いつから」と明言することはできません。全国各地に数多くの城がありますが、築城の開始について断言できるものは、むしろ稀でしょう。その数少ない事例が武田氏の〔躰躰が崎館〕なのです。



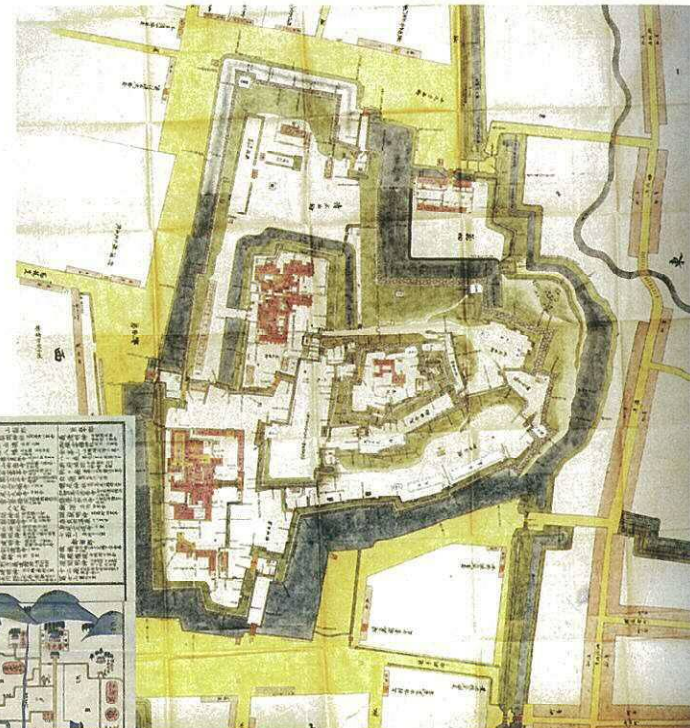
甲府城稲荷櫓

## 城下町の整備

一条小山への甲府城築城と並行して、城下町の整備も進んだと考えられます。甲府城の城下はふたつの区域からなります。城の北側が、躰躰が崎城下を再編した古府中で、ここには全26町が設けられました。いっぽう、南東に展開する新府中23町は、文字どおり新たに造られた碁盤目状の街区です。中央の伊勢町(のちの山田町)、八日町、三日町、連雀町(のちに上連雀町・下連雀町)、柳町、魚町の各町には、躰躰が崎城下から有力商人が移住してきたといわれます。江戸へと続く甲州道中も、柳・八日の両町を貫いていました。その周辺には工町、鍛冶町、桶屋町といった職人町が広がり、城下全域を取り囲むように寺院が配置されました。なお、甲府城下の人口にかかわる最古のデータは寛文10(1670)年のもので、そこには12,772人と記録されています。



懐宝甲府絵図  
(山梨県立博物館 所蔵)

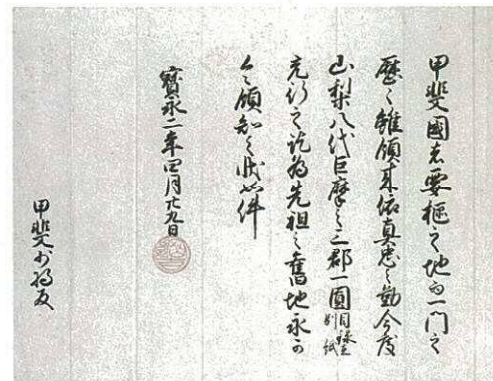


らくしどう  
楽只堂年録より「甲府城絵図」  
(柳沢文庫 所蔵)

## 是ぞ甲府の花盛り

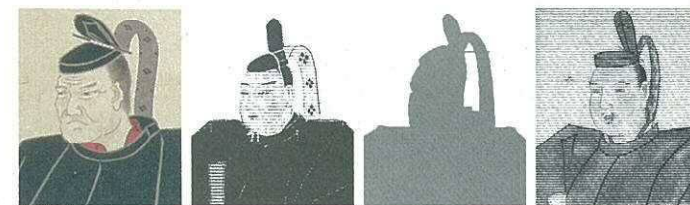
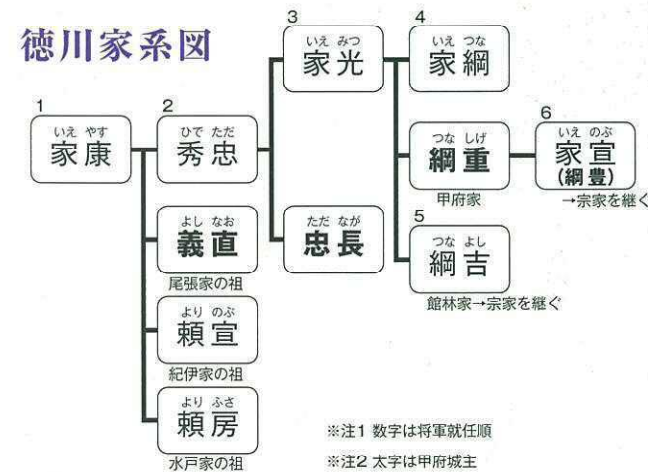
### 江戸時代前期の歴代甲府城主

慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いに際し、甲府城主浅野長政・幸長父子は徳川家康に属して戦功をあげ、幸長は領地加増のうえで紀伊国和歌山へ移封されます。代わって、甲斐国は徳川氏の直轄領となりました。その後、義直、忠長、綱重、綱豊(のちの6代将軍家宣)と、家康の血を引く徳川氏一門が甲斐国を領有します。江戸への西からの入口に位置する甲斐国は、幕府にとってまさに要地でした。



甲斐国領知朱印状(柳沢文庫 所蔵)

#### 徳川家系図



徳川 義直 在任期間 1603~1607	徳川 忠長 在任期間 1616~1632	徳川 綱重 在任期間 1651~1678	徳川 綱豊 在任期間 1678~1704
----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------

宝永元(1704)年12月、その甲斐国を5代將軍徳川綱吉より与えられたのが、柳沢吉保です。領知朱印状には、「真の忠義を重ねてきたおまえだから」「先祖にゆかりのある場所だから」といった文章が並びます。柳沢氏は、武田氏の一族一条氏の流れをくむ青木氏の分かれです。青木氏や柳沢氏は、釜無川



柳沢吉保像(一蓮寺 所蔵)

右岸上流を本拠に武田氏に仕えていましたが、その滅亡後は徳川家康に従いました。吉保は幼少のころから、綱吉の側近くに仕え、その將軍就任により、立身出世を遂げたのでした。幕府にとっての要所を任されたこと、それも先祖にまつわる地であったこと、吉保の喜びはいかばかりだったことでしょう。

### 柳沢時代の甲府の賑わい

甲斐国を与えられた吉保は、幕府の許可を得て、甲府城の修築に取りかかりました。石垣や上墨(土手)の補修に加え、屋形曲輪には藩主の住まい、楽屋曲輪には儀礼を目的とした殿舎が、それぞれ造営されました。家老など上級家臣の邸宅や、中下級家臣たちの住居の整備もいっせいに進みました。これらの建設に従事する職人は、江戸や遠く京都からも集められ、18世紀初頭の甲府城下はたいへんな活況を呈しました。

宝永6(1709)年、將軍綱吉が没すると、吉保は隠居し、子息の吉里が藩主の座に就きます。幕閣のただ中であって江戸を離れることのなかった吉保とは異なり、吉里は国許に居住しました。城主の甲府入りは、吉里が唯一の事例です。大家臣団の移住により城下は賑わい、町方の人口は江戸時代を通じて最大の14,000人に達しました。

吉里は城内楽屋曲輪にしつらえた能舞台で自ら舞い、広く町人たちに見物させました。古典文学や和歌などに精通する藩主の甲府居住は、城下の人々にも少なからぬよい影響を与えたことでしょう。

——棟には棟、門に門を並べ、作り並べし有様は、是ぞ甲府の花盛り、時を得たりと見えにけり

「兜富雑記」のこの記述は、柳沢時代の甲府城下の繁栄ぶりを今に伝えています。

### 永慶寺の造営

甲府城主となった吉保は、城下の北東郊外岩窪村に柳沢家の菩提寺として龍華山永慶寺を建立しました。勧請開山には黄檗宗大本山萬福寺(京都府宇治市)の住持で、中国からの渡来僧悦峯道章が招かれました。宝永4(1707)年に悦峯が萬福寺住持に就任し、江戸城で將軍綱吉に拝謁したとき、吉保との交流が芽生えたようです。吉保の保山元養という道号や法諱も、悦峯により授けられたものといえます。正徳4(1714)年11月、吉保が江戸六義園(柳沢家下屋敷)で没すると、遺骸はここ永慶寺に運ばれ、悦峯を導師に葬儀が営まれました。享保9(1724)年、吉里が大和郡山(奈良県)に移封されると、永慶寺もその城下へ移されました。その折、吉保夫妻は恵林寺(甲州市)へ改葬されています。永慶寺の跡地は、山梨縣護国神社となっています。



大泉寺総門  
廃寺となった永慶寺の建物は、破却するにはしのびなく、近隣の寺院に寄進されたといえます。武田信虎の菩提寺大泉寺には本堂と総門が移築されました。本堂はその後火災に遭い、総門のみが現存します。

## 甲府城下周辺の村々

### 城下周辺の村々

江戸時代、現在の甲府市域には95の村がありました。最も標高の低い大津村と標高の高い黒平村とでは、その差は900mにも達します。地形の差、気候の差は、暮らしぶりの違いとなって現れました。盆地底部は稲作を中心とする農業地帯でしたが、南北の山間地帯は耕地に恵まれず、豊富な林産資源を利用した産業が生計の柱となっていました。城下の生活は、周辺の村々によって支えられていました。日々の食物や薪炭は、周辺諸村の産物でしたし、町方や武家の奉公人の多くも、諸村の出身者でした。

### 中道往還と特権商人

現在の甲府市域を縦断していたのが中道往還です。甲府城下と駿河湾を最短距離(約80km)で結んでいます。古代以来、甲府盆地への文化の流入路でしたが、戦国時代には、武田信玄・織田信長・徳川家康らの著名な武将たちも行き来しました。江戸時代を迎えると、駿河の海産物をほぼ一日で甲府魚町まで運ぶ道筋として利用されました。街道筋の村々では、馬を使って荷物を輸送、販売する稼ぎ仕事で盛んでした。

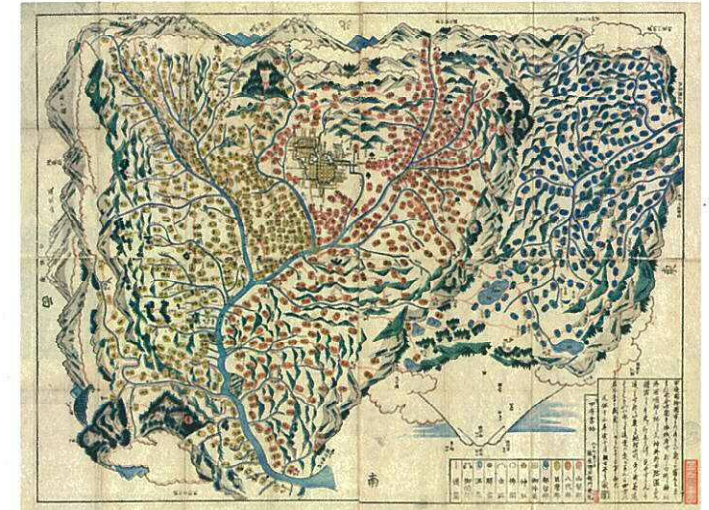


現在の中道往還



中道往還 東照神君《徳川家康》御殿場跡

彼らは、居住地によって「九一色商人」「右左口商人」などと呼ばれています。武田氏の滅亡後、甲斐国に入った徳川家康から、特別な働きがあったとして、当時のしきたりにかかわらず自由に商売を行う特権を与えられた人々でした。



懐宝甲斐国絵図 天保13(1842)年(山梨県立博物館 所蔵)



今も残る中道往還の石畳

中道往還ルート図



現在の右左口宿周辺図

# 甲府に根づく庶民文化

## 太平の世

甲府徳川家の時代に元禄文化の影響で萌芽していた甲府の文化は、学芸を好んだ柳沢吉保・吉里父子の治世で花開き、その後150年近く続く甲府勤番制の時代に発展しました。甲府勤番は、江戸幕府の役職で、最大の任務は甲府城を守ることでしたが、江戸時代という太平の世のもとでは、江戸から派遣される勤番士のもと



『甲府買物独案内』  
(山梨県立図書館 所蔵)



歌川国芳筆  
『甲府八日町正月初売之景』  
(山梨県立博物館 所蔵)



歌川広重筆「諸国祭礼尽双六」より  
『甲府道祖神祭』  
(個人 所蔵)



二代歌川広重筆「甲府道祖神祭幕絵 東都名所 洲崎汐干狩」全体 (山梨県立博物館 所蔵)



二代歌川広重筆「甲府道祖神祭幕絵 東都名所 洲崎汐干狩」部分 (山梨県立博物館 所蔵)

らす様々な文化的・学問的影響は大きかったといえます。

また学者や文化人などが盛んに往来し、書画、俳諧、生け花、囲碁将棋、歌舞伎、人形浄瑠璃、能楽などが甲府城下にあふれていました。

## 道祖神祭の幕絵

一枚の幕絵は約1.8m×約11～16mと豪華なもので、小正月の「道祖神祭」で町ごとに作成し甲府城下を飾り立てました。幕絵には和漢名将伝・甲州道中宿々・太閤記といった様々な画題で浮世絵が描かれ、初代・二代歌川広重をはじめ当時の有名絵師が手がけていました。

## 学問ことはじめ

甲府で最初の官立学校「甲府学問所」(山梨大学教育学部の前身)ができたのは寛政8(1796)年のこと。甲府勤番士とその子弟の教育を目的とし、その後上層の町人や百姓の子どもも受け入れるようになり、文化2(1805)年「徴典館」と名前も変わりました。この頃、甲府勤番支配の松平定能により「甲斐国志」の編纂も始められました。一方、庶民には、読み・書き・そろばんを教える私塾や寺子屋が城下と周辺の村方に数多く開業されていました。



徴典館門  
(現在は上野原市に移築されている)

## “江戸の役者の給金定め”～亀屋座

明和2(1765)年に教安寺の境内で芝居の興行を始めた亀屋与兵衛は、のちに西一条町(現在の若松町)に本格的な芝居小屋を建てました。この亀屋座には、五代目・松本幸四郎、三代目・坂東三津五郎、七代目・市川團十郎といった時代の名優も度々興行に訪れ、関東八座に数えられるほどに繁盛。「江戸の役者の給金定め」と語られるほど甲府町衆のレベルの高さは広く知られたものでした。



市川鯨蔵(五代目・團十郎)像  
(東洲斎写楽画)

明治に入ると桜町の「三井座」(後の桜座)、三日町の「巴座」、相生町の「舞鶴館」(後の甲府座)も建ち、甲府庶民の代表的な娯楽の場として賑わい続けました。

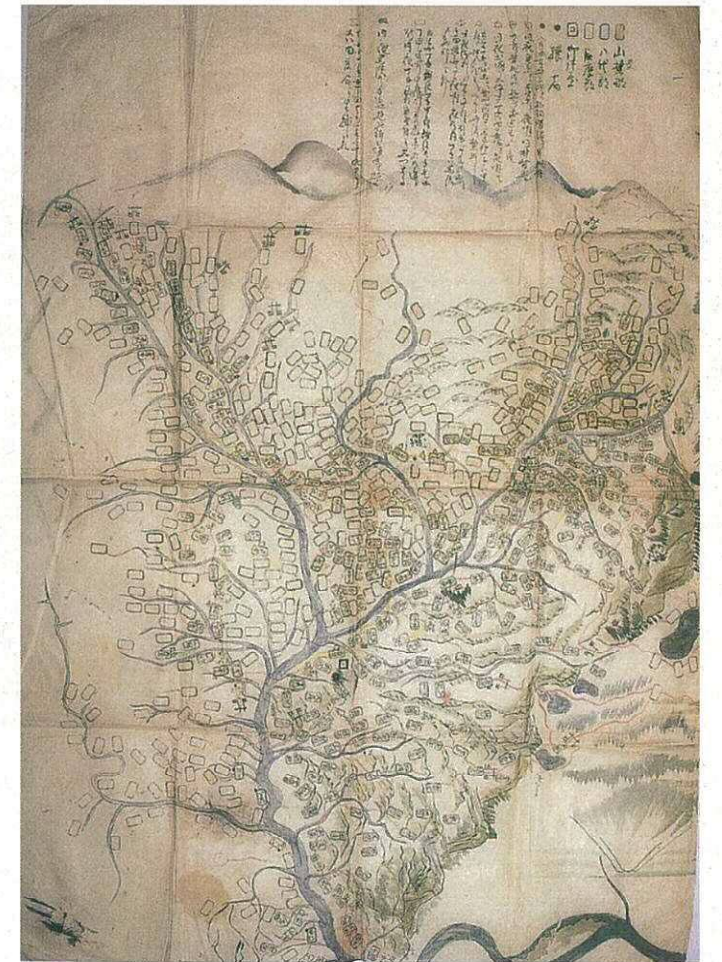
## 幕末維新の時代

### 郡内騒動、動乱のはじまり

近世、甲府城下を囲む地域に約80以上の村が分布していました。この村方に暮らす農民こそ、江戸時代の社会の繁栄を根底で支えた存在でした。厳しい年貢の取り立てや水害や飢饉にも苦しんでいた各地の農民の間で、たびたび幕府支配に対する騒動や一揆も起きました。天保7(1836)年に起きた農民一揆「郡内騒動(天保騒動)」は、徳川幕府の土台を揺るがしたともいわれる大規模な一揆で、甲府や村々では打ちこわしも発生しました。

深刻な飢饉や米価の暴騰、絹織物の暴落に追いつめられた郡内の農民が笹子峠を越え、甲府勤番を圧倒、一時期は甲府が無法地帯となりました。

この騒動は揺らぎはじめていた徳川幕府の内情をさらす結果となり、後の倒幕運動につながったともいわれます。この頃から1867年に徳川幕府が約260年の幕を閉じるまでの幕末動乱期、甲府でも「黒駒勝蔵」など甲州博徒の横行や、民衆による「お札降り」をはじめとする世直しを求める運動など、さまざまな出来事が起こりました。



天保騒動絵図 辻家文書(山梨県立博物館 所蔵)



# 明治維新下の甲府

## 開港、甲州商人の台頭

嘉永6(1853)年のペリー提督による黒船来航により、日本は幕末から明治維新にかけて大変革時代の幕を開けますが、安政5(1858)年の「日米修好通商条約」による安政6(1859)年の横浜開港は、「甲州商人」が大活躍を始めるきっかけにもなりました。そこで注目されたのが甲州の物産の生糸でした。

篠原忠右衛門は横浜で外国人と生糸の貿易をはじめた日本人の第一号となり、また代表的な甲州商人として知られる若尾逸平も、この横浜での生糸と水晶の貿易を足がかりに実業界に進出。若尾式器械を発明し、多数の工女を集め、その後の製糸業の発展にも大きな役割を果たしました。



若尾逸平一代図屏風(南アルプス市立美術館 所蔵)



勝沼近藤勇之図(山梨県立博物館 所蔵)

## 甲府城を目指した新撰組

黒船来航は開国派と攘夷派、佐幕派と倒幕派という国内の対立を生み、さらに慶応2(1866)年に倒幕を目指す薩長同盟が成立。慶応3(1867)年、15代将軍慶喜が政権を朝廷に返還。約260年続いた徳川の世は終わりを告げますが、新政府軍(官軍)と旧幕府勢力が戦った「戊辰戦争」は、徳川支配下にあった甲府にも及びました。慶応4(1868)年3月5日、板垣退助らの率いる新政府軍が甲府城に無血入城すると、翌6日には甲斐国に侵攻した旧幕府軍の甲陽鎮撫隊(旧新撰組)と新政府軍との間に柏尾(甲州市勝沼)の戦いが繰り広げられ、旧幕府軍の敗走で甲斐国は新政府軍の支配下に入りました。旧武田家臣の末裔である板垣が派遣されたのは甲斐国民衆の支持を得るためだったと言われています。



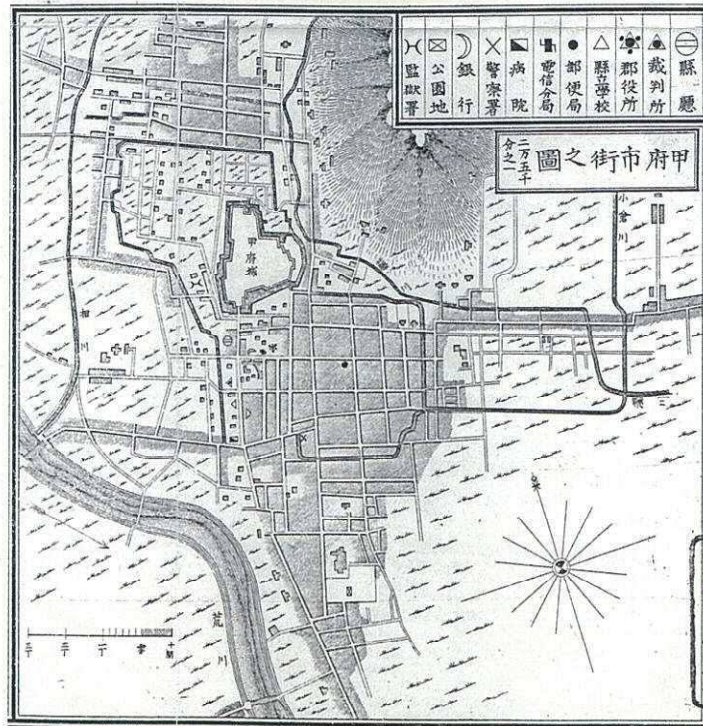
近藤勇像(甲州市)



近藤勇



板垣退助



甲府市街之図《明治15年》(山梨県立図書館 所蔵)

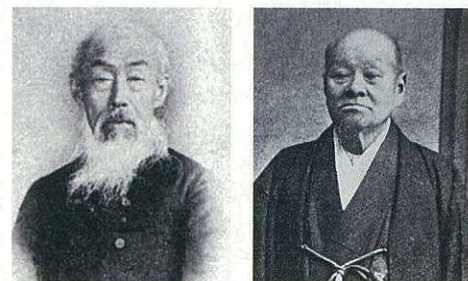
## 近代甲府の幕あけ

明治の新政府は、中央集権による近代国家建設を目指し、明治2(1869)年に版籍奉還を実施。甲斐府は「甲府県」と改められ、さらに明治4(1871)年の廃藩置県により「山梨県」となりました。県下は、山梨・巨摩・八代・都留の4郡が80区に分けられ、今までの名主などの村役人の呼称を廃止して戸長・副戸長と呼ぶことになりました。また、国民はみな公的に名字を持つことになるなど、明治維新という、かつてない社会の大変革の波が近代甲府にも押し寄せました。

## ご維新と大小切騒動

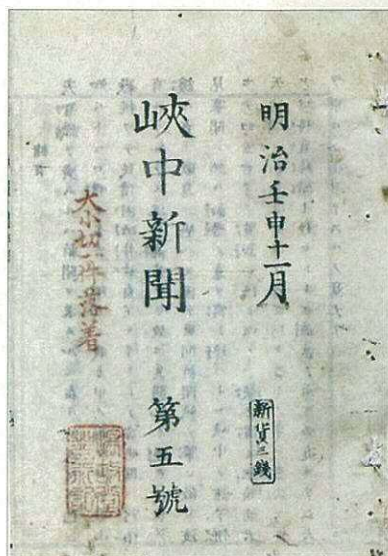
明治に入って間もない甲府市民の生活は混乱していました。長びく物価の高騰に加え、明治政府は、甲州伝来の「大小切税法」の廃止を決定。明治5(1872)年、廃止撤回を求め農民による「大小切騒動」が起きました。大小切税法は、年貢の九分の三を「小切」、九分の二を「大切」として金で分納し、残りを米で納めるもの。甲斐独自の制度で、農民の負担を軽減し、養蚕や織物などとの兼業を確立させていました。明治政府はこれを認めず、税法の廃止を布告。これに国中三郡の97カ村の農民が武装蜂起、陸軍が出動するまでに騒動は拡大しました。

こうして武田信玄時代からの遺法であった大小切税法も、ご維新の嵐のなか消えていくことになりました。

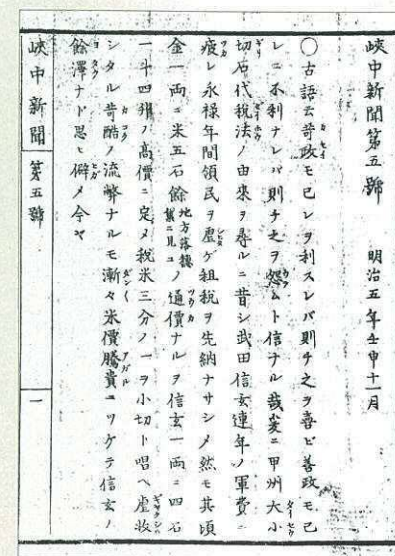


山梨県初代県令 土肥謙蔵

大小切騒動の収束に尽力した富岡敬明



峡中新聞第五号表紙 大小切一件落着が報じられている



峡中新聞第五号

◀「峡中新聞」は明治5(1872)年の7月1日に創刊されましたが、その直後の8月に大小切騒動が発生。「第四号附録」では騒動発生直前の状況を、「第五号」では裁判により関係者全員の処分が決まったからの状況を「一件落着」と伝えています。(表紙に赤く「大小切一件落着」と印刷)。文面から、騒動の原因として、首謀者や百姓が大小切税法を「信玄公が残した恩恵」としていたためと考えられていたことが読み取れます。第四号と第五号は共に11月に発行され、当初月1回ぐらいの発行予定が騒動によりずれ込んだことがわかります。新聞名の「峡」の文字を漢音の「こう」と読ませたのも特徴的で、和紙を袋綴した雑誌型、木彫りの文字(木活字)で刷られていました。

## 知ってる?

### 明治まで残った 甲斐国独特の税法

「大小切税法」は甲斐国内の山梨・八代・巨摩3郡に限って使われていたもので、いつできたか正確な年代は分かっていません。でも昔の山梨県民は、大小切は武田信玄が農民の負担を減らすために作った、とてもありがたい法律だと信じていました。明治政府がこの納税方法を禁止した時、山梨県で大きな反対運動が起きたのはそんな理由があったからだと言われています。



## 自由民権運動と新聞の活躍

明治10年代は甲府でも自由民権運動が高まりを見せました。元水戸藩士で民権運動の指導者となった佐野広乃や、山梨県初の自由党員の小田切謙明が活躍するなか、板垣退助が亀屋座での演説会に訪れています。

また、この時代の甲府では多くの新聞が発行されていました。八日町で古本屋を営んでいた内藤伝右衛門により発行された県内初の峡中新聞(後の「山梨日日新聞」)をはじめ、自由民権思想を打ちだした峡中新報や、なまよみ新聞、観風新聞などです。をとめ新聞は女性の啓蒙を目的とするものでした。



山梨県甲府勸業場之図(山梨県立博物館 所蔵)

## 近代都市甲府の成立

### 藤村式建築に飾られた 近代甲府のまち

明治幕開けの混乱を治め、近代甲府の発展に貢献したのが、明治6(1873)年に新たに権令(翌年、県令)に就任した藤村紫朗でした。藤村県令は「藤村式建築」と呼ばれる木造擬洋風建築を奨励し、新時代にふさわしい県都甲府の街づくりを目指しました。

まず甲府城の旧城郭内を市街地として整備。そこに桜町、錦町、常盤町、紅梅町、春日町といった新しい町が生まれ、藤村式建築を採用した勸業製糸場、学校、裁判所、県病院などが次々と建てられました。明治10(1877)年には高価なガラスをふんだんに使用した「ギヤマン堂」の異名を持った県庁舎も完成。当時の新聞記事には、「ロンドン、パリの都も斯くやあらなん」と誇らしげに綴られました。



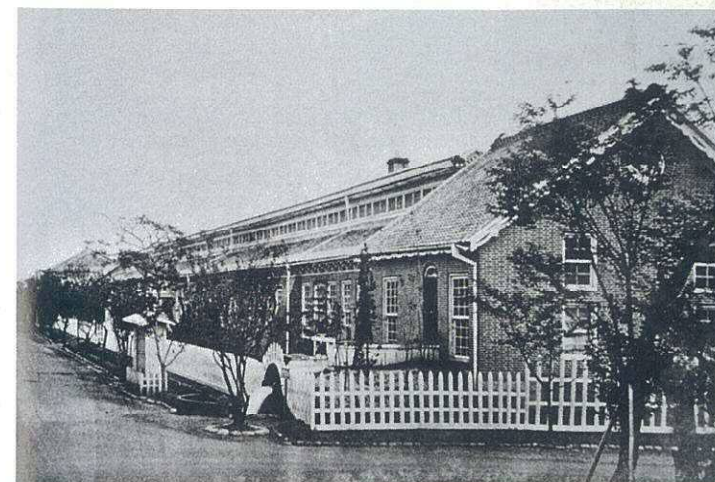
山梨県令 藤村紫朗

山梨県庁《明治10(1877)年》

### 殖産興業による甲府の製糸業

藤村県令は、明治政府が掲げていた「殖産興業」にも力を入れました。明治7(1874)年に錦町に完成した県営の勸業製糸場は、洋風レンガ造りの立派な建物に製糸の器械をそなえつけた、群馬県の富岡製糸場(世界文化遺産)に並ぶ先進的な製糸場でした。その後、甲府市内には最新の器械を導入した製糸工場がたくさんでき、この頃、甲府で働く女性の1割以上が製糸工女でした。

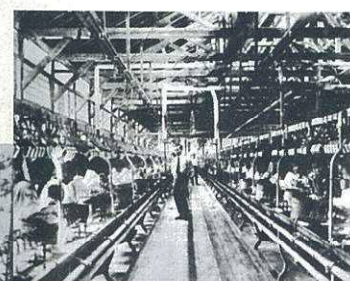
こうしたなか、明治19(1886)年に山田町の製糸場で女工たちによる「雨宮製糸場争議」が起きました。厳しい管理下で重労働を負わされていた100人を超える女工が待遇改善を求め職場放棄を決行。日本で最初の本格的な労働争議(ストライキ)と言われていて、この後2か月の間に甲府の製糸場でストライキが立て続けに起きています。日本における資本主義社会と産業革命の幕開けを象徴する出来事でした。



勸業製糸場《明治7(1874)年》



県営勸業製糸場完成当時の賑わいを伝える新聞記事



昭和初年ごろの製糸場内部

明治の日本において富国(国を豊かにする)を築くために展開されたのが養蚕業と製糸事業の推進でした。山梨県の場合も「養蚕業こそが豊かな県づくりにつながる」として、官民挙げての普及に努力し、その大きな成果として県営の製糸工舎が明治27(1894)年10月16日に開業されました。

「峡中新聞」から名前を変えた「甲府新聞」(第百四十一号)は、白砂を敷きつめた新しい工場が、ランプやちょうちん、五色の布で飾られた華々しい開業式の様子を伝えています。

正装した県令や大袴姿の210名の女工が参列した式典では祝詞があげられ饗宴が催されなど、まるで「祭事」のようだったと綴られています。また前後数日間是一般にも開放され、新しい工場の「広く美しいこと」や器械類の「精妙さ」を公開されたことや、その盛況ぶりは四方から「蟻が集まるよう」とあり、県営製糸場の開業が多くの県民の関心を引き起こしたことがわかります。



# 戦争と復興

## 武田神社創建と市立動物園

開府400年の新聞記事



山梨日日新聞 1919年4月11日 武田神社が創建され翌12日に最初の祝祭が行われることを報じている。



山梨日日新聞 1919年4月13日 武田神社創建の際の神事の模様を詳しく報じている。

知ってる?

### 武田神社 ～こちらは創建100年～



武田神社拝殿

甲府城が建設されると、躑躅が崎館は館としての機能を失いました。江戸時代には、空堀の一部は開墾され、土塁の内側には草木や竹が生い茂っていたといえます。くだって明治13(1880)年6月。天皇の県内巡幸を機に館跡の公園化やここへの信玄祭祀が議論されるようになりましたが、募金による神社建設資金の調達は思うに任せず、計画は停滞してしまいます。こうした状態に風穴をあけたのが、大正4(1915)年に実現した武田信玄に対する従三位の追贈です。大正天皇即位祝賀の一環だったといいますが、ここから神社創建の機運が盛り上がりを見せます。翌5年には〔武田神社奉建会〕が結成され、官民協力のもと、神社創建に向けての取り組みが本格化しました。6年9月には、内務省より神社創建の許可が下ります。8年4月11日、社殿が竣工し、鎮座祭が執行されると、神社は県社に列しました。平成31(2019)年は、武田神社にとっても創建100年という節目の年です。

知ってる?

### 甲府市立動物園も開園100年



ゾウのゆり子さんの鼻をなでるタイ駐在の太田一郎日本大使と当時の甲府市長野口二郎夫妻

大正8年に開園した甲府市立動物園は全国でも4番目に古い動物園です。昭和20年の甲府空襲で焼失し、昭和27年に再開されました。その当時は、動物の種類も少なく動物園の代名詞であるゾウの来園が望まれました。

昭和29年、タイ国から甲府市立動物園にゾウの提供が実現。5月27日、ゾウの「ゆり子さん」が到着し、太田町公園広場で盛大な歓迎会が開かれました。



甲府市立動物園の入口《昭和初期》

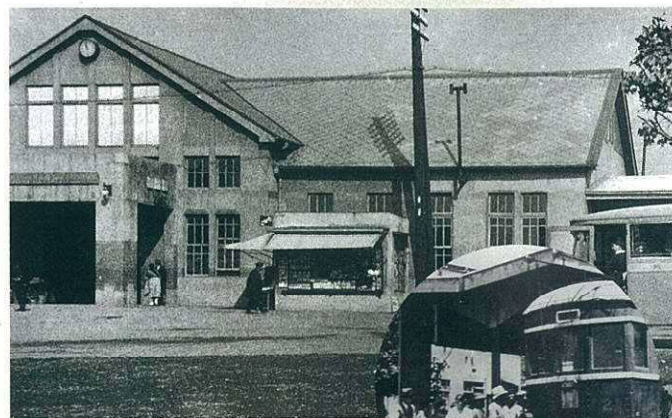
### 昭和という時代のはじまり



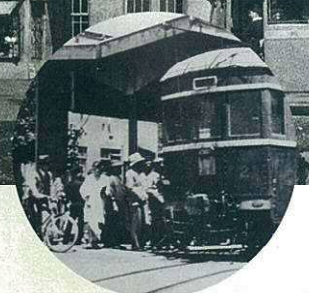
甲府市上空からの航空写真《昭和5年頃》

昭和5(1930)年、舞鶴城(甲府城)の内堀を埋め立て現在の県庁舎別館が建てられました。他に県会議事堂、県立図書館、甲府郵便局、武徳殿、甲府市水道局など近代的な官公庁施設が周辺に整備され、山梨県の政治の中心地が再び甲府城内に戻ったといえます。地上6階地下1階建ての甲府ビルディング(のち松林軒デパート)が甲府の街にそびえ立ったのもこのころです。

昭和のはじめの甲府は、近代化と恐慌、豊かさ、格差社会と、戦争の足音と、光と影が入り交った複雑な時代でした。



甲府駅前《昭和10年代》



通称「ポロ電」の名で親しまれた山梨電気鉄道

### 交通網の電氣化と「ポロ電」登場

交通面では昭和3(1928)年に現在の身延線が開通し、甲府の南の玄関口として南甲府駅が誕生。昭和6(1931)年には中央線が電化。昭和5(1930)年には、山梨電気鉄道の路面電車(のち通称「ポロ電」)が走るようになりました。自動車の量も大正後期から急増し、車が巻き上げるホコリや泥、道路の傷みが問題となり、昭和4(1929)年にはじめて柳町通りが舗装されたのに続き、市内の舗装工事も進んでいきました。



甲府銀座の東側入口《昭和初期》

### モダンガール行き交う街

きれいになった繁華街の通りには通称「甲府銀座」の名もお目見えしました。中心街には喫茶店、ダンスホール、洋食店、ビアホール、バーなどが次々と開店し、昭和5(1930)年にはアーケード街「甲府桜座百貨市場」、昭和10(1935)年以降は「松林軒デパート」「岡島百貨店」が開店。モダンガールやモダンボーイが甲府の街を歩き交い、当時6館あった活動写真館は大盛況でした。甲府名物として知られた夜見世の華やかな灯りは戦前まで続きました。一方、街角では物乞いする人や学校にも行けない新聞少年の姿が時代の影を映し出していました。

# 甲府空襲



コンクリート製のビルを残して一面の焦土となった甲府市中心街。左は松林軒、右は岡島百貨店

## 忘れられない七夕前夜

昭和20(1945)年、7月6日の午後11時23分、寝静まった甲府の街に空襲警報が鳴り響きました。午後11時50分ごろ、愛宕山に投下された照明弾が照らし出した甲府の街に、アメリカ軍爆撃機B29による絨毯爆撃が開始されました。無抵抗の市民をおそったB29は131機。使用された焼夷弾は約970トン。甲府市全域の74%を焼野原にするまで爆撃の雨は続きました。

「たなばた空襲」と呼ばれたこの空襲で亡くなった甲府市民は1,127名、重軽傷者1,275名、約7割の家が焼失。昔ながらの木造建築が建ち並んでいた美しい甲府の街並は見失われ、一面の焦土に山梨県庁や松林軒デパートなど鉄筋コンクリートの建物だけが焼き残されました。大切な暮らしも、豊かだった文化や産業も、すべてが一夜にして焼失しました。



7月6日の空襲で惨状を極めた県庁西側の被害。《昭和20年》

### 甲府空襲

**房関東中小都市を襲ふ**  
二百機、分散焼夷攻撃  
千葉 甲府等へ

清水へ六十機  
九州へ百六十機  
百十機 海南明石へ

近畿 中機  
九州へ百六十機  
四萬六千余発

新航空隊設置  
伊豆にパイロット隊

敵本土本格空襲へ  
陸海交通破壊も執拗

シタン下流  
敵一萬進出焦る

山梨日日新聞 1945年7月8日 新聞記事より

# 焦土から立ち上がる甲府市



昭和20年10月の甲府駅前

## 焦土から立ち上がる市と市民

昭和20(1945)年8月の終戦を迎え、甲府の中心街には飲食店や喫茶店、パーマネント屋、映画館などが再開し、繁華街の活気も戻ってきました。これらは市民自らの復興でしたが、一方、甲府市は駅前広場や道路拡張による街路整備を盛り込んだ大規模な「甲府戦災復興都市計画」を策定。これはやっとの思いで建て直した商店や家の立ち退きを余儀なくされる市民から強い反対にあい、「平和通り」が幅50mから36mへ縮小されるなど、計画の見直しや遅れをみながらも昭和30年代にかけ確実に進みました。駅前広場から南に延びる平和通りが完成したのは昭和30(1955)年のことです。

### 知ってる?

#### 太宰治の小説に甲府空襲のことが書かれている?



太宰治

日本の有名な小説家の太宰治は甲府をよく訪れ、湯村温泉の宿に泊まって小説を書いたり、甲府出身の女性と結婚して、しばらく甲府で新婚生活もおくっています。戦争中は奥さんの実家に疎開していて甲府空襲にあいました。その体験が作品「薄明」に詳しく書かれています。また太宰治は甲府の町のことを、「シルクハットを倒さまにして、その帽子の底に、小さい小さい旗を立てた、それが甲府だと思えば、間違いなし。きれいに文化の、しみとおっているまちである」と書いています。そんな街並みも太宰治が暮らした家も戦争ですべて焼けてしまいました。

## 空襲前と後の甲府

甲府空襲の被害は空襲のあった都市のなかでも大きなものでした。それまで甲府では富士山を目標に日本に飛来するB29がひんぱんに見られましたが、市内に大きな軍需工場がなく、むしろ安全な地域として東京から疎開学童の受け入れもしていました。甲府市民の多くが「B29は通過するだけで、甲府に空襲は無いだろう」と思っていたといえます。

空襲後の街は目を覆うような惨状でしたが、人々は焼け跡から拾った缶詰を食べたり、焼けたトタンを集めてバラックを建て、野天酒場や野天映画館も開かれました。焦土にもこんこんと湧き続けた甲府温泉が開放され人々の癒しの場となりました。



終戦4年目の昭和24(1949)年10月、甲府市制60周年を記念して甲府銀座で開かれた屋外ファッションショー

### 第58回甲府市制祭

**けふ五十八回の市制祭**  
人口十方に迫る  
陰に越冬至難の七百五十戸

山梨日日新聞 1946年10月17日 第58回市制祭 新聞記事より

▲空襲の翌年の昭和21(1946)年の10月17日の紙面では、神嘗祭でもあるこの日、第58回目となる市制祭が開催されること、あわせて、甲府市の人口が「10万人に迫る」と題した記事を掲載。市民生活や商工業等における順調な復興の様子を伝えています。

# 高度成長下での発展



甲府駅上空からの眺め《昭和33年》

## 発展の波に乗って

戦後復興を終えた昭和30年代から40年代、甲府の街は高度経済成長の波に乗り、目ざましい変貌を遂げるようになります。

昭和34(1959)年、NHK甲府放送局とラジオ山梨(現・山梨放送)のテレビ放送がはじまり、家々の屋根にテレビアンテナが乱立するようになりました。駅前では、昭和35(1960)年に水晶噴水塔、昭和40(1965)年に山交百貨店、昭和41(1966)年には北口に山梨文化会館などが次々と登場し、昭和42(1967)年には甲府駅の南口と北口が舞鶴陸橋でつながりました。これ以後、甲府の街は戦前の姿から一変していくことになります。



中央本線に特急「あずさ」が登場《昭和41年》



甲府駅前ロータリーに完成した水晶の噴水《昭和35年》

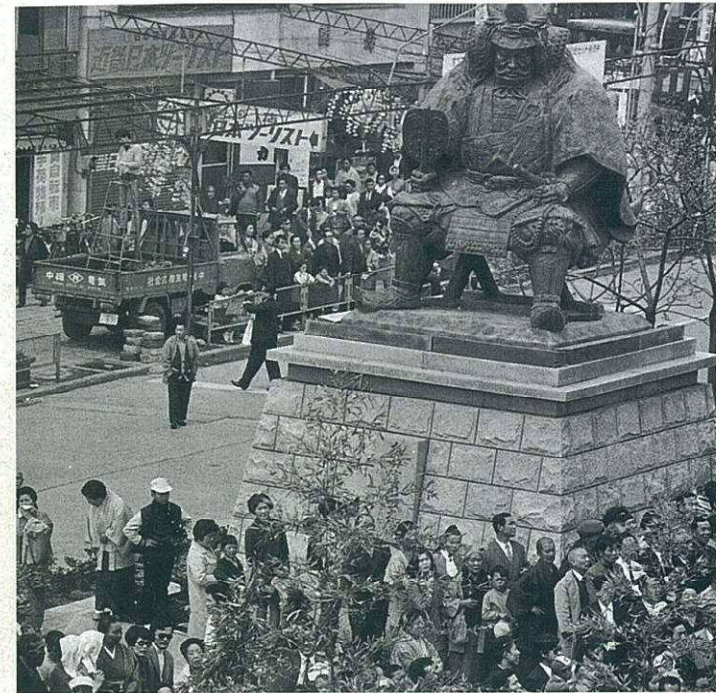
舞鶴陸橋の建設工事

## 交通網でも大変革

自動車の往来が当たり前になってきた甲府市街地からは、まず長く市民の足として活躍した「ボロ電(山梨交通電車)」が姿を消しました。かわって昭和40年代には新御坂トンネル、甲府バイパス、精進湖線などが開通。また中央本線の甲府-新宿間の複線化などにより所要時間が大幅に短縮され、さらに昭和57(1982)年になると中央自動車道が全線開通。このような交通網の整備も、甲府が近代地方都市として大きく発展していく道すじをつくったといえます。

## 復活した信玄公ブーム

甲府駅南口のシンボル「信玄公銅像」がお目見えした昭和44(1969)年、NHKで大河ドラマ「天と地と」が放映され、全国的な武田信玄ブームが起きました。甲府市は信玄のおひざもとの地として注目され、市内の史跡や文化財にたくさんの観光客が訪れるようになりました。昭和45(1970)年には「第一回信玄公祭り・甲州軍団出陣」が大々的に開催され大成功をおさめました。甲府市民にとっても郷土の歴史的なルーツに再びつながるきっかけとなりました。以来、信玄公祭りは甲府を代表する日本最大級の武者祭りとして今日まで引き継がれています。



武田信玄公像の完成《昭和44年》

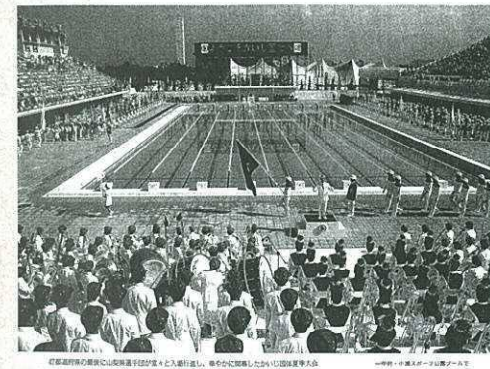
## 現代の甲府の顔ができていく

昭和53(1978)年に甲府市貢川にできた「ミレーの美術館」として知られる「山梨県立美術館」、甲府駅近代化計画にもとづき昭和60(1985)年に完成した新駅舎と駅ビル、昭和61(1986)年の「かいじ国体」にあわせて整備された「小瀬スポーツ公園」など、その後、甲府市と山梨県の経済・文化・スポーツ振興の拠点となるシンボリックな施設も整備されていきました。



生まれ変わった甲府駅ビルと広場

## 水の祭典華やかに開幕



少年男子 清水が人賞1号

山梨日日新聞 1986年9月8日  
新聞記事より

力強く県選手団行進



かいじ国体開会式 小瀬スポーツ公園《昭和61年》

# 平成、新しい時代へ

## 私たちの街「こうふ」の新時代

平成元(1989)年、甲府市は市制施行100周年を迎えました。この年、甲府では、さらなる新しい時代の幕開けを象徴する二つの大きなできごとがありました。100周年の記念事業として「こうふ博'89」を小瀬スポーツ公園で大々的に開催。9月15日から11月12日の約2か月にわたった会期中に来場者約56万人を集めました。また、この年の8月に「山梨リニア実験線」の建設が決定。東京-甲府-大阪間を超高速で結ぶ夢のリニアモーターカーの実現に向けた第一歩が、まさに踏み出された年でした。



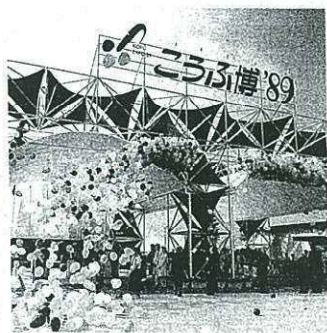
市制施行100周年を祝って盛大に行われた甲府大好きまつり



こうふ博'89とともに開催されたパンダ展《平成元年》

### 甲府博覧会

## 新たな未来へ まい進



ことしの地方博のとう尾を飾る甲府博覧会も好評



甲府博と展パンダ

### 夢と希望がいつぱい 希少動物保護へ援助も

#### 甲府博と展パンダ

甲府博覧会「こうふ博'89」は、平成元年(1989)年9月15日から11月12日まで、小瀬スポーツ公園で開催された。来場者約56万人を集めた。この博覧会では、希少動物保護への援助も実施された。パンダ展は、平成元年(1989)年9月15日から11月12日まで、小瀬スポーツ公園で開催された。来場者約56万人を集めた。この博覧会では、希少動物保護への援助も実施された。

甲府博覧会「こうふ博'89」は、平成元年(1989)年9月15日から11月12日まで、小瀬スポーツ公園で開催された。来場者約56万人を集めた。この博覧会では、希少動物保護への援助も実施された。パンダ展は、平成元年(1989)年9月15日から11月12日まで、小瀬スポーツ公園で開催された。来場者約56万人を集めた。この博覧会では、希少動物保護への援助も実施された。

山梨日日新聞 1989年10月17日  
新聞記事より

## スポーツの発展、ヴァンフォーレ甲府の発足

“スポーツは甲府の文化”。もともとスポーツが盛んだった地域性を生かし、甲府市では官民一体となった様々なスポーツ活動による地域社会の活性化と文化の継承をすすめています。

昭和40年創部の「甲府サッカークラブ」を前身とする「ヴァンフォーレ甲府」は、地元企業と地方公共団体、市民・県民の共同出資によるプロサッカーチームとして平成11(1999)年からJリーグの舞台で活躍しています。チーム名は武田信玄の軍旗「風林火山」にちなみ、フランス語の「Vent(風)」と「Forêt(林)」を合わせて命名。地域の歴史と今と未来をつなぐ存在となっています。



平成11年ヴァンフォーレ甲府Jリーグ元年のメンバー

## 県都甲府にふさわしい玄関口に

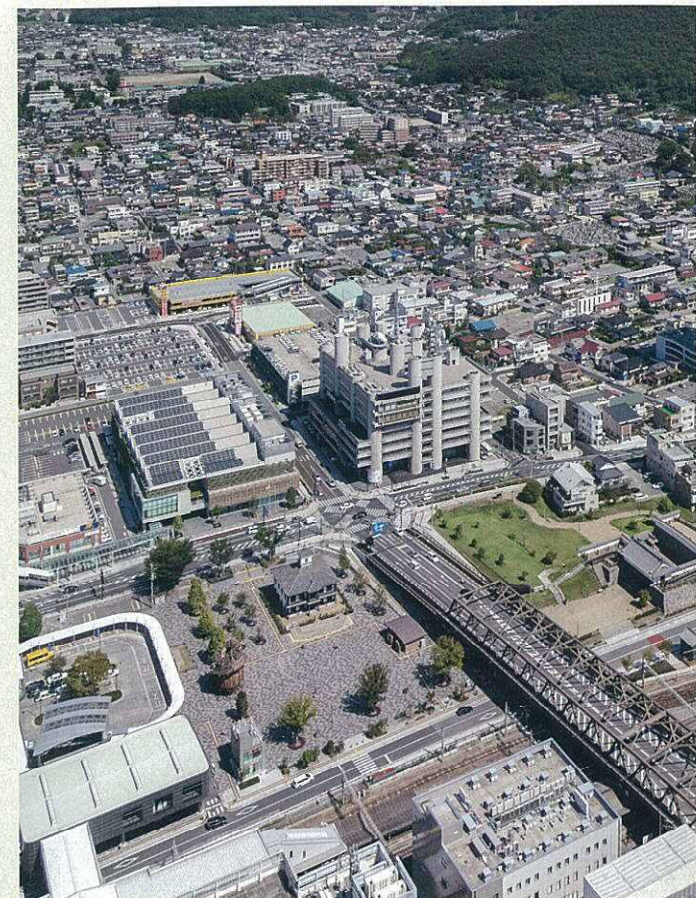
山梨県と甲府市では、平成2(1990)年から着手された舞鶴城公園(甲府城)の復元整備をはじめ、甲府駅周辺の再開発事業を進めてきました。平成15(2003)年には稲荷櫓、平成19(2007)年には山手門が復元され「甲府市歴史公園」として開放されました。また駅北口には、平成22(2010)年に「よっちゃばれ広場」が完成し、「藤村記念館」が移築されました。平成24(2012)年には「新県立図書館」が開館し、平成25(2013)年には「甲州夢小路」もオープン。これまでの南口の商店街に加え、舞鶴城公園から北口にかけての周遊が可能となり、甲府の玄関口が魅力的に生まれ変わりました。



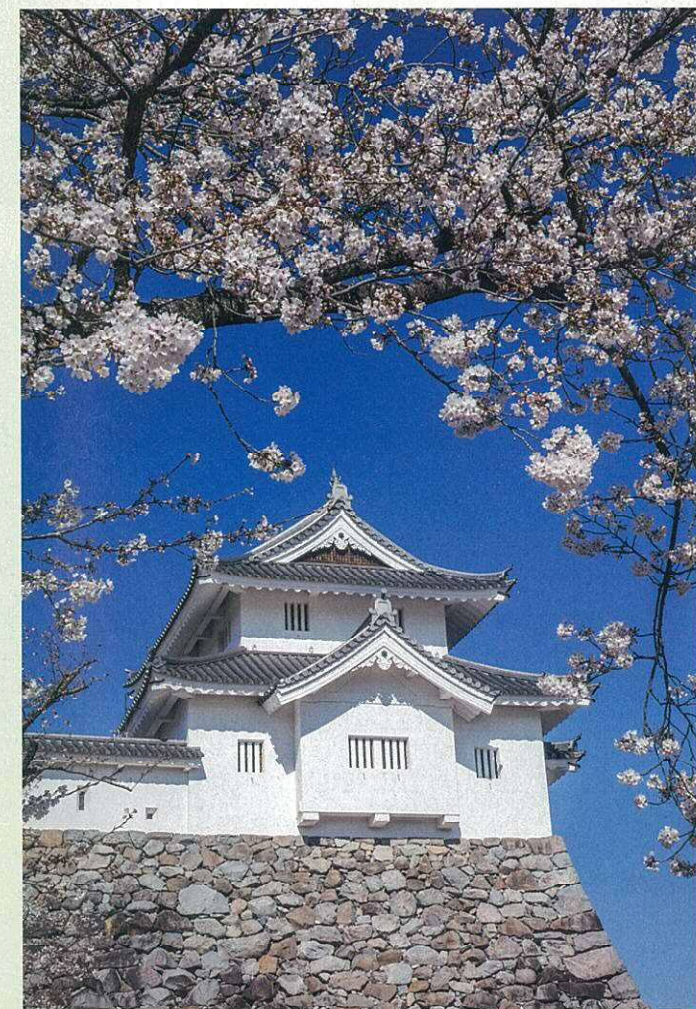
山梨県立図書館



甲府駅北口に移築された藤村記念館



甲府駅北口上空からの眺め



舞鶴城公園の桜と稲荷櫓

# そして未来へ



リニア実験線

## 2019年、こうふ開府500年 そして中核市移行へ

明治22(1889)年に約3万人からスタートした甲府市は、その後、周辺町村との合併を重ね、平成12(2000)年には念願であった「特例市(現・施行時特例市)」に指定されました。さらに平成18(2006)年には、中道町及び上九一色村北部地域と合併して、現在にいたっています。

そして平成31(2019)年、私たちのまち甲府は、武田信虎が「甲斐の府中」として本拠を構えてから数えて、500年という大きな節目を迎えます。

また、平成31(2019)年4月には中核市へ移行します。

※中核市とは、「規模や能力が比較的大きな都市の事務権限を強化し、できる限り住民の身近なところで行政サービスが提供できる大都市制度のひとつ」です。

### リニア甲府駅

## リニア駅はアイメッセ北



山梨日日新聞 2013年9月19日  
新聞記事より

### 県内詳細ルート JR発表

東京―名古屋 県外5駅も

### 県内詳細ルート JR発表

駅の立地効果 全県へ

## 知ってる?

### 2021年は信玄公 生誕から500年

毎年、武田信玄の命日4月12日前の金・土・日曜日に開催される「信玄公祭り」。なかでも「甲州軍団出陣」は、川中島の合戦に向かう甲州軍団を再現した武者行列で、勇壮な戦国絵巻が繰り広げられるメインイベントです。その最初の戦勝祈願式が行われる「武田神社」は、500年前に信玄の父・武田信虎が拠点とした館の跡地にあります。続いて出陣式の舞台になる「舞鶴城公園」は江戸時代の甲府の政治の中心地。出陣式では「三献の儀」なども再現されます。さらに甲州軍団は今の「甲府市役所」の前を進軍。武田信玄が生きた戦国時代が甲府の街によみがえります。



信玄公祭り・甲州軍団出陣式《舞鶴城公園》

### 参考文献

- 甲府市史 通史編 第二巻 近世
- 甲府市史 通史編 第三巻 近代
- 甲府市史 通史編 第四巻 現代
- 甲府市史 別編Ⅲ 甲府の歴史
- 市史編纂だより
- まんが甲府の歴史(上) 古代 近世編
- まんが甲府の歴史(下) 近代 現代編
- 甲府の歴史 坂本徳一
- 山梨百科事典 山梨日日新聞社
- 山梨の20世紀 山梨日日新聞社
- 山梨日日新聞百年史 山梨日日新聞社
- 写真集山梨百年 山梨日日新聞社
- 写真集甲府100年 甲府市



# 甲府今昔-1



▲甲府市上空パノラマ(スマートフォンまたはタブレットでQRコードからアクセスすると360°パノラマ画像が見られます)

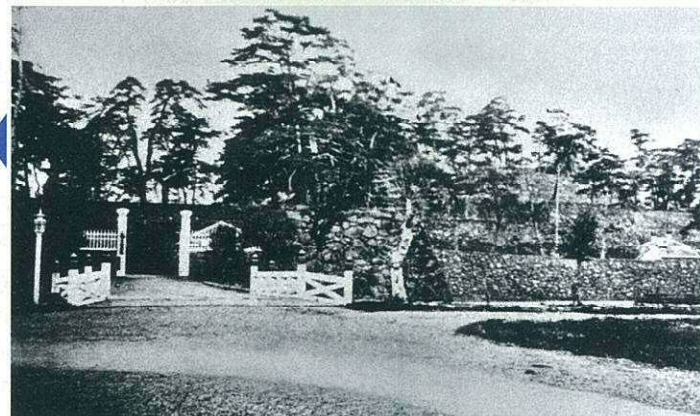


▲完成したばかりの山梨県庁舎と甲府城跡周辺の航空写真《昭和5年頃》

スクランブル交差点▶



▲現在の甲府市庁舎上空より



▲明治10年頃の甲府城跡

◀舞鶴城公園より甲府の街並み



▲甲府城跡からの甲府の街並み《明治10年頃》

# 甲府今昔-2



▼舞鶴城公園遊亀橋方面を望む



▲中央線開通を記念して開催された一府九県連合共進会 舞鶴公園会場の入口《明治39年》

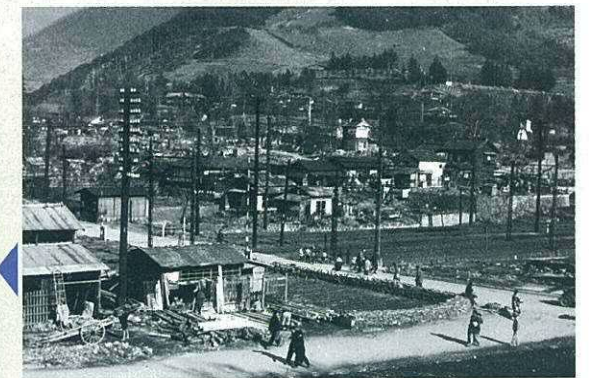
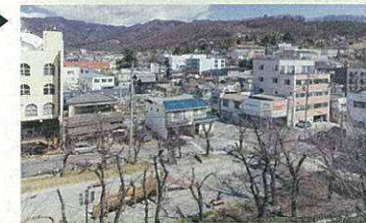


▲錦町交差点《大正～昭和初期》



◀甲府警察署東交差点より  
みずほ銀行甲府支店方面

現在の舞鶴通り踏切付近▶



▲桜町道踏切付近の復興ぶり《昭和20年代》



▲拡幅工事を終えた平和通り《昭和25年》

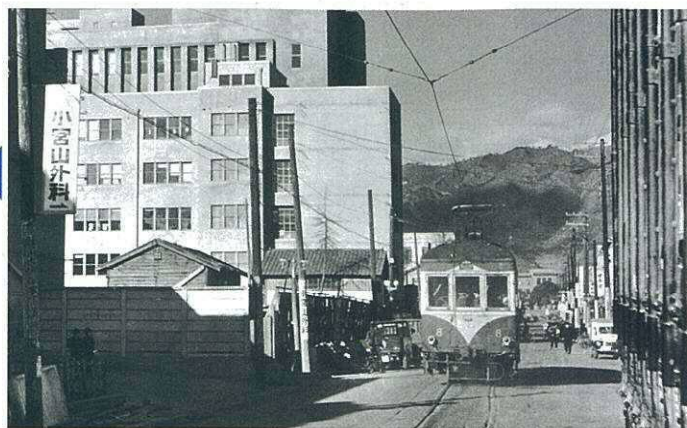


▲現在の甲府警察署前交差点歩道橋付近

# 甲府今昔-3



▲現在の甲府地方検察庁東側付近



▲錦町通りを走る山梨交通の電車《昭和32年頃》



▲昭和30年代前半まであったかすがも〜の北交差点の交通整理



▲現在のかすがも〜の北交差点からオリオン通り方面



▲オリオン通りのえびす講のにぎわい《昭和33年》

現在のオリオンスクエア▼



▲武田神社参道の桜並木《昭和33年》

現在の武田通り▼



▲甲府駅前ロータリー《昭和35年頃》

現在の甲府駅前ロータリー風景▶



# 開府500年のあゆみ



年代	こうふのあゆみ
1519年 永正16年	武田信虎が躑躅が崎の館をつくり甲府を開く
1521年 大永元年	武田信虎の嫡男晴信(信玄)が生まれる
1540~60年代	武田信玄が、城下町の整備・信玄堤の築造など、民政に功績を残す
1553~64年 天文22~永禄7年	武田信玄が、越後(新潟県)の上杉謙信と川中島で5回戦う
1573年 天正元年	武田信玄が信州(長野県)駒場で死去
1582年 天正10年	武田勝頼が田野(旧大和村)で自害、武田家滅亡する
1600年 慶長5年	浅野長政・幸長父子により、甲府城がほぼ完成
1704年 宝永元年	柳沢吉保が甲府城主になる
1724年 享保9年	柳沢吉里が大和郡山藩(奈良県)に所領替えになり、甲府番支配が設けられる
1805年 文化2年	本格的な芝居小屋「亀屋座」が西一条町(今の若松町)に開演し、歌舞伎興行で人気を博す
1836年 天保7年	大規模な農民一揆が起こり(郡内騒動)、農民たちが甲府にせまる
1854年 安政元年	安政の大地震で、甲府城下が大きな被害を受ける
1868年 慶応4・明治元年	東山道を東に向かう官軍が甲府城に入る
1869年 明治2年	甲斐府が甲府県となる
1871年 明治4年	甲府県が山梨県となる
1872年 明治5年	「大小切騒動」起きる
1873年 明治6年	藤村紫朗が権令(翌年、県令に昇任)として甲府に着任
1874年 明治7年	県営勸業製糸場が完成
1877年 明治10年	錦町に山梨県庁が完成
1889年 明治22年	甲府に市制施行(7月1日)
1903年 明治36年	中央線八王子―甲府間が開通
1907年 明治40年	全県下に大水害
1913年 大正2年	市内上水道整備
1915年 大正4年	新市庁舎が相生町に落成
1919年 大正8年	武田神社の創建 甲府市遊亀公園附属動物園開園
1928年 昭和3年	富士身延鉄道(のち国鉄、現JR身延線)が全線開通
1931年 昭和6年	中央線甲府―八王子間の電化が完成
1945年 昭和20年	甲府空襲(7月6日)
1947年 昭和22年	えびす講市復興祭
1952年 昭和27年	平和通り舗装工事
1953年 昭和28年	昇仙峡特別名勝に認定
1954年 昭和29年	昭和の合併が一区切り
1959年 昭和34年	伊勢湾台風で被害
1960年 昭和35年	駅前ロータリー、噴水塔完成
1966年 昭和41年	市民憲章制定
1969年 昭和44年	甲府駅前に信玄銅像設置
1970年 昭和45年	第1回信玄公祭り開催
1971年 昭和46年	甲府バイパス開通
1982年 昭和57年	中央自動車道 勝沼―甲府昭和開通
1985年 昭和60年	甲府駅ビル完成
1986年 昭和61年	「かいじ国体」開催
1989年 平成元年	市制100周年 「こうふ博'89」「甲府大好きまつり」開催
2000年 平成12年	特例市となる
2006年 平成18年	中道町、上九一色村北部地域と合併し、現在の甲府市域となる
2007年 平成19年	甲府城山手御門を復元し、歴史公園オープン
2013年 平成25年	新市庁舎が落成
2017年 平成29年	甲府駅南口再整備完成
2019年 平成31年	開府500年「つなぐ歴史 かがやく絆 こうふ開府500年」 中核市へ移行

